The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	学習ストラテジーの自己調整を促進する学習支援の考察 : 台湾人日本語学習者に対する短期留学準備教育のアクションリサーチを通して
Author(s)	林, 盈萱
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54319
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【18】

氏　　名	林（リン）　盈（エイ）　萱（ケン）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２３９０５　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	**学習ストラテジーの自己調整を促進する学習支援の考察－台湾人日本語学習者に対する短期留学準備教育のアクションリサーチを通して－**
論文審査委員	（主査） 教　授　成田　一 （副査） 教　授　西口　光一　　准教授　坂内　千里

論文内容の要旨

言語教育研究の関心が教えることから学ぶことや学習者へと移るにしたがい、学習者の個人差に関する研究が90年代から盛んに行われてきた。学習者に学習ストラテジーを指導し、意識させることにより、自らの学びを自分自身で管理できるように導くことが現在の外国語教育の考え方の重要な視点の一つになっている。

これまでの学習ストラテジー研究を概観すると、学習ストラテジー使用に影響を与える要因については、学習者要因（性差、学習歴、学習スタイル、学力など）が主に検討されてきた。一方で、学習者のインプットを得るよりどころとしての学習環境との相互作用にも注目すべきだという指摘があるものの、それらの研究は日本語を第2言語として習得する場合（ＪＦＬ）について検討したものが多い。ＪＦＬ環境である台湾においては、教室で日本語を学ぶ時間が多く、学習ストラテジーの使用についても、教室の中での学習指導とそれに基づく実際の学び方は無視できない要因になっている。教師主導型の教育をうけてきた学習者のために学習者中心の学習環境をデザインし、それに基づく指導を実施することによって、彼らの学習ストラテジーがどう変わるかを探求することは重要な研究課題であるにもかかわらず、そういう研究は管見の限りでは見られない。また、学習ストラテジーの指導に関する研究においては、学習ストラテジーを導入する際に、研究者あるいは指導者が有効だと判断したものを恣意的に学習者に指導する傾向があった。そして、指導の結果を判断する際に、研究者あるいは指導者が指導した学習ストラテジーがどの程度学習者に意識されはじめたのか、あるいはそれが使われているかどうかによって、学習者が自律的になったかどうかが判断されていた。

本研究では、従来あまり検討されてこなかった、学習ストラテジーの使用に関する教育支援のあり方による影響とともに、学習ストラテジー調整過程の個人差という新たな観点を加えて、学習者個々の学習目標やそれらが抱える問題を検討し、それに対応しうる学習ストラテジーを意識させる学習支援を行った。一連の調査から、以下のような結論が得られた。

学習ストラテジーとは従来考えられてきた学習者個人の中で起きる思考と行為というものだけではなく、学習者が周りの学習リソースと相互作用する中で常に再構築され、一人ひとりの個別性をもつ一連の思考と行為であるということが判明した。また、従来のように、学習者が置かれている環境や学習者の心理状態を無視して、単に指導者が有効だと考えた学習ストラテジーを学習者に導入することは適切ではない。学習者のニーズを考慮した「学習環境の構築」、「学習動機の促進」と「適切な学習ストラテジーの調整」および「使用維持」という「環境」、「人」、「行為」の３者のサイクルがうまくいくことが習得に繋がると考えられる。

本研究では、「環境」「人」「行為」の３者がうまく循環していくように、新たな教育モデルをデザインした。まず、教師が学習環境を工夫することから出発し、学習者に将来への期待や多様なストラテジーの存在に気づかせ、自己調整学習の概念を提供し、学習者の学習動機に働きかけた。学習者にどのような学習ストラテジーが自分に適しているかについて意識してもらい、自分に相応しい学習ストラテジーの使用が維持できるように、指導者から学習者の学習状況をフォローアップする。さらに、学習効果が出た際に、適宜フィードバックをし、学習者の自信が生まれるように、支援するという一連の取り組みを行った。

その結果、上記の支援により学習者が自ら自分にとって相応しい学習ストラテジーを使用していくことになることが判明した。そして、教師から新しい学習ストラテジーを紹介された後、学習者がそれをどのように受け止めるのか、どのように活用していくのかも、1人ひとりで異なっていることが分かった。したがって、学習ストラテジーについても学習者の個別性を重視した学習支援が必要であることが明らかになった。本論文の構成は以下の通りである。

まず、第1章では、従来の外国語教育、または日本語教育における学習ストラテジー研究を概観し、これまでの研究に残された問題点として、学習ストラテジー使用について教育支援のあり方による影響に関する考察が不十分であること、従来の学習ストラテジー指導の研究の出発点と評価の視点の妥当性に疑問があること、学習ストラテジーの指導を受けた後の学習者の調整過程が不明であること、といった問題点を取り上げ、以下の4つの研究課題を示した。

研究課題①　学習者はどのような学習上の課題を抱えているのかを理解する。

研究課題②　学習者の学習上の課題を明らかにした上で、どのような教育モデルが提供できるのかを考案する。

研究課題③　教師主導型の教育支援から学習者中心的な教育支援に転換することにより、学習者の学習ストラテジーの使用がどのような影響を受けるのかを観察する。

研究課題④　学習者が学習ストラテジー指導を受けた後、自らの学習ストラテジーを維持するのか、あるいは調整していくのか。どのような要因が、学習者の学習ストラテジーの調整に影響を与えるのかを検討する。

第2章では、バンデュラ（1979）の相互決定理論とシャンク＆ジマーマン（2007）による自己調整学習理論を取り入れ、学習における学習環境による影響と学習者の自己調整における個人差の問題について検討した。さらに、第2言語習得における学習ストラテジーの位置づけを示した。

第3章では、研究アプローチについて検討した。本研究では、アクションリサーチという手法を採用し、学習者一人ひとりの学習ストラテジーの自己調整のありかたを観察するために、実際の教育現場を調査のフィールドとして、ある問題に対して、解決策を考え、解決策を実施した結果を基にして、さらに解決策を修正し、改善していくというアプローチをとった。

第4章では、「学習者はどのような学習上の課題を抱えているのかを理解する（研究課題①）」ために一連の調査を行った。本研究では台湾のA科技大学の日本の短期留学を控えた大学院生を調査対象にした。学習者が置かれた社会文化的文脈の特徴について知るために、まず、台湾の高等教育機関における日本語教育事情についての資料を収集した。そして、A科技大学の教員に対して、聞き取り調査を行い、調査対象者に、アンケート調査と会話の実態調査を実施した。その結果、調査対象が学校制度の制限を受け、学習リソースと学習ストラテジーの選択の幅が限られていることが明らかになった。また、それが原因で、学習意欲が低下したケースも観察された。さらに、自らの学習環境の構築において、テレビ以外の日本語学習リソースへの気付きが必要であることも分かった。

第5章では、4章で明らかにした学習上の課題を明らかにした上で、「どのような教育モデルを提供できるのか（研究課題②）」を考案した。手順として日本に滞在している留学生の留学生活を提示することを念頭に置き、日本に滞在中の台湾人留学生にインタビュー調査を行い、留学生活の悩みと悩みに対処する際に使用する学習ストラテジーについて調べた。さらに、調査した結果をカリキュラムと学習リソースに取り入れ、そして個々のテーマで取上げた課題に沿って、関連する学習ストラテジーを提示した。

第6章では、教師主導型の教育支援から学習者中心的な教育支援に転換したことにより、学習者の学習ストラテジーの使用がどのような影響をうけるのかを分析した（研究課題③）。新たにデザインした教育モデルに基づいて指導を実施した結果、学習者が自分の学習問題をメタ認知的に意識できるようになり、問題を克服するために、元々使用してきた学習ストラテジーに加え、紹介されたもののうち、当時の文脈で、自分にとっては必要であるもの、使いやすいもの、あるいは使ってみたいものを自分の学習に取り入れている様子を観察した。そして、新しく身についた学習ストラテジーが留学の後でも運用されていることも明らかになった。

第7章においては、学習者が学習ストラテジー指導を受けた後、自らの学習ストラテジーを維持するのか、あるいは調整していくのか、どのような要因が学習者の学習ストラテジーの調整に影響を与えるのか（研究課題④）を検討した。その結果、新しい教育モデルに基づく指導を受けた後に、すべての学習者が自分の学習ストラテジーを調整するとは限らなかった。学習者1人ひとりが以前から使用していた学習ストラテジーの「習慣化」、そして「学習動機」、「言語習熟度」、「新しい学習ストラテジーの受容度」、「学習パートナーを含めた環境」などの要因が学習ストラテジーの調整に関わっていることを浮き彫りにした。

第8章は、終章として、本研究で明らかになった結果を総括し、学習ストラテジーの指導の意義を再検討した。また、アクションリサーチを実施してきた研究者としての振り返りと研究者の成長について述べた。また、実証主義的な研究で重要視されてきた妥当性と信頼性とは異なり、アクションリサーチの結果を評価する基準とされている適用可能性と倫理性、多角的な視点からの観察が重要であることについて述べた。

論文審査の結果の要旨

これまでの学習ストラテジー研究では、学習ストラテジー使用に影響を与える要因として、学習者要因（性差、学習歴、学習スタイル、学習動機など）が主に検討されてきたが、近年、学習環境との相互作用も注目されている。外国語環境である台湾においては、教室で日本語を学ぶ時間が多く、学習ストラテジーの使用についても、教室の中での学習指導とそれに基づく実際の学び方は無視できない。そこで、教師主導型教育を受けてきた学習者のために学習者中心の学習環境をデザインし、学習ストラテジーを指導し、意識させることにより、自らの学びを自己管理できるように導き、学習者の個人の学習ストラテジーがどう変わるかを調べることが外国語教育の重要な課題になっている。

本論文では、従来あまり検討されてこなかった、学習ストラテジーの使用に関する教育支援のあり方による影響とともに、学習ストラテジー調整過程の個人差という新たな観点を加えて、学習者個々人の学習目標やそれらが抱える問題を検討し、それに対応し得る学習ストラテジーを意識させる学習支援を行い、一連の調査から、「学習ストラテジーとは、学習者個人の中で起きる思考と行為だけではなく、学習者が周りの学習リソースと相互作用する中で常に再構築され、一人ひとりの個別性をもつ一連の思考と行為である」という結論を得て、「（従来のように）学習者の環境や心理状態を無視して、単に指導者が有効と考えた学習ストラテジーを学習者に導入することは適切ではなく、「環境」「人」「行為」の３者がうまく循環するように、新たな教育モデルを開発した。

まず、教師が学習環境を工夫し、学習者に将来への期待や多様なストラテジーの存在に気づかせ、自己調整学習の概念を提供し、学習者の学習動機に働きかけた。学習者にどのような学習ストラテジーが自分に適しているかを意識させ、自分に相応しい学習ストラテジーの使用が維持できるように、指導者が学習者の学習状況をフォローし、学習効果が出た際に、適宜フィードバックをし、学習者の自信が生まれるように支援する、という一連の取り組みを行った結果、学習者が自分にとって相応しい学習ストラテジーを調整使用するようになった。

理論面の論点と実践面での教育内容の記述に改善するべき点はあるが、本論文は、これまでの学習ストラテジー研究を網羅的に検討し、学習環境及び個人差という要因が適切に位置づけられていないことを、課題として的確に指摘した上で、台湾の大学院における海外研修プログラムにおいて、学習環境の変化と学習ストラテジーの調整が課題となっていることを、現場の教育実践の中で明らかにしている。そしてこれを教育課題として、調査に基づいて独自の補助教育プログラムを開発し、アクションプログラムの一部として適切に実施し、研究に取り組み、①教育的な面では、海外研修プログラムについて一つの有効な対応方法を提示し、②研究的な面では、学習ストラテジーの修正について、５つのタイプを発見するという成果がみられる。後者については、アンケートやインタビューなど種々の手法を用いて多角的に検討している点が評価できるが、前者については、（論文中で言及されているように、）作成した（DVD付の）教材が、研究対象となった大学以外の教室でも使用され効果が出ており、留学前の標準教育プログラムとしても高く評価できる。

以上のように、審査委員会は、本論文が博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。